

ふじのくに芸術祭 2023（第 63 回静岡県芸術祭）文学部門文芸コンクール審査員寸評

【創作】 小説 21 作品、児童文学 8 作品の応募があった。小説の高評価は、社会性のあるものにも集まった。詩情のあるもの、ユニークなものにも評価があった。歴史作品はテーマの明確化が求められた。児童文学の高評価は、子供の成長する姿、大人が回りつつつながる姿が描かれたもの。（中西 毅）

【エッセイ】 本部門には評論五編、随筆十九編の計二十四編が寄せられました。いずれも筆者の熱い情熱が伝わってくる力の籠った作品ばかりで、まさに甲乙つけ難く、審査員が嬉しい悲鳴を上げさせられた本年でした。評論、随筆を問わず、主題とした対象に対する自らの熱い思いや鋭い分析を、いかに読者に伝えるかの努力、工夫が大切に思われました。（小長谷 建夫）

【戯曲・シナリオ】

芸術祭賞『ちゃんちゃら』

主人公の葛藤や成長の描写が丁寧。構成力のレベルも高く、作者の伝えたいことが揺るがず光っている。登場人物も魅力的で読後感が爽やか。

奨励賞『素敵なあなたよ』

設定が面白く、構成力も高い。主役 2 人が丁寧に描かれている。反面それ以外が話を進める『駒』になっているところがあった。（高橋佑治）

【詩】 応募作品の多くが、作者の体験したことをそのまま言葉に置き換えようとしているという印象を受けた。それぞれがかけがえのない経験で、だからこそ文字に記し留めたいという願いが生まれるのだと思う。ただ、その際に、一度自分というものを括弧に入れた上で、生々しいその記憶を見渡してみることが、詩に限らず創作には欠かせない条件だろう。そのような意味で、「仮面」をつけた作者の登場に期待したい。（大石 嘉美）

【短歌】 短歌部門には六十三編の応募があった。芸術祭賞受賞の「春色の教室」は、国際クラスで学ぶ多国籍の子供たちの様子を、現場に立つ教師ならではの細やかな目線で描いたもので、素材の鮮度が際立つ作品だった。短歌は日々の暮らしと心を映すのに丁度よい手鏡サイズの詩形。一人でも多くの方が応募してくださることを願っている。（林 充美）

【俳句】 今年度の応募者数は 93 編。昨年に比べて 10 編多くなりました。93 編の応募者数の構成は 70 代が 44 編と最も多く、次いで 80 代 35 編、60 代 9 編、50 代 3 編、90 代 2 編でした。作品を拝見させていただきましたが、全体的に無難な句が多く感動の核心をついた作品が少なかったように思いました。平成 27 年度の 117 篇に比べるとまだまだです。年齢を問わずどしどし応募されることを希望します。（太田 依子）

【川柳】 応募者数は 51 名で去年より減少し、かつ年齢層が上がってきています。コロナ禍も一段落し、コロナがらみの句はほとんどありませんでした。しかし、ウクライナ戦争の句や AI の句が目立つようになり、時代の移り変わりが反映され、川柳で世相を切るような句がたくさん出てくれましたと思われました。（増田 信一）